

Title	京都大学図書館百年：新村出先生への絵葉書
Author(s)	奥山, 智靖
Citation	静脩 (2001), 37(4): 18-19
Issue Date	2001-03
URL	http://hdl.handle.net/2433/37612
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

京都大学図書館百年

新村出先生宛の絵葉書

奥山智靖

その絵葉書は『南紀土俗資料』という本にはさまれて眠っていた。現在、私は図書館内の一室で「遡及入力」の一端を担っている。いつもと変わらぬ仕事を繰り返していた2000年初冬のある日のこと、何やら絵葉書らしきものが出てきたのだ。新村出先生、はて？その時、同僚の言葉が胸に突き刺さる。「え、奥山君、図書館員志望なのに新村出さんのことも知らないの。『広辞苑』の生みの親だよ。」

絵葉書発見の報せを現物を携え、掛の部屋に行った時の皆の反応が普段とはまた違っていった。どうやらよほど「京大的」に貴重なものを発見したらしいということだけは何となく伝わってきた。このままではいけない、そんな想いが頭の中を駆け巡り、新村出先生のことを調べさせる決心をさせた。

定石通り私は人名辞典にあたることから始めた。図書館所有の資料の中で有効と思われたのは次の3点。日外アソシエーツから出ている『現代日本執筆者大事典』及び『伝評・評伝全情報45/89』、三省堂の『コンサイス人名辞典』。その中から私は息子猛氏の手による『「広辞苑」物語』と紀田順一郎氏の著『名著の伝記』を頼りに時代背景をみていくことにした。

吉田神社近くのとある食堂で定食をほおばりながら読んだ『「広辞苑」物語』は感動ものであった。辞書そのものよりも辞書の生成過程に興味がある私にとって、この本はまさにうってつけであった。

『「広辞苑」物語』によると新村出先生は明治44年10月附属図書館長に着任され、発見した絵葉書には日付が(2年3月25日)とあるので、『南紀土俗資料』の発行年次大正13年と合わせて昭和と見るのが妥当であろう。裏の写真は正・昭和初期から流行した当地名所シリーズ

か。今はなき『写楽』¹の特集で読んだ記憶がある。昔は金子の催促を絵葉書でやるという行為自体珍しくなかったと聞く。武蔵温泉とあるから、九州在住の人が実父関口孝吉氏が山口県令を勤めた時代の関わりで出したのであろうか。また、新村先生はこの絵葉書をどんなおもいで受け取ってこの本にはさみ込んだのだろうか。



『名著の伝記』には以下の面白いくだりがあった。まず新村出先生が映画『雁』²を見て以来高峰秀子の熱烈なファンとなり、玄関から居間までポスターを貼っていたこと、『広辞苑』が戸塚文子氏により朝日新聞の連載³一冊の本⁴において取り上げられたのは辞書としては異例だったこと、宮尾登美子氏が蔵書のいっさいを手離しても『広辞苑』だけは手離さなかったこと等々。最後に紀田氏は、新村出先生のことを評して「＜辞書英雄時代＞の最後を飾る存在として登場し、新しい情報化社会の辞書への橋渡しをなしとげた」と結んでいる。

広辞苑ひもとき見るにスモッグと
いふ語なかりき入るべきものを(白芙蓉)

昨今日本語の危機が叫ばれて久しい。昨年あるニュース番組で、森首相の発言に対して「お灸を据える」という言葉をあてたことに鍼灸関係者が反発し、治療行為以外に使ってくれるなとマスコミ各社に要望したという一幕が取り上げられていた。³

時を遡ること昭和22年元日、時の吉田茂首相がラジオ放送で労働組合の闘争を評して「不逞の輩」のすることと非難、大変な物議を醸した。その時、新村出先生は氏独特の関心の寄せ方を示している。それは『老人随筆・不逞録』と題するノートになって残っているが、それによると元日以降の新聞の関係記事の切抜が貼られ、ところどころ「ふてい」の部分に朱筆がふられていたという。

新村先生のこだわりは「不逞」を30数種類の辞書、古今の国語辞典漢和辞典はもとより、和英・和仏・和独等に及んだという。新村先生なら「お灸を据える」という表現にいかなる反応を示されたであろうか、そんなことを想像してみただけでも楽しい。

余談になるが、私の母校愛知県立大学附属図書館には息子新村猛先生が寄贈された図書をもとにした新村文庫がある。そこで育った人間が、縁あって京都大学に来て、父君新村出先生宛の絵葉書を発見したということにまた不思議なものを感じる。

(おくやま ともやす：附属図書館遡及入力室)

1 『写楽』22号(3巻3号)：1982 515-529pp.

2 『雁』：豊田四郎監督、1953

3 筒井康隆 朝日新聞2001/2/5 21面

●●●●●●●●●●●●●●●● 図書館の動き ●●●●●●●●●●●●●●●●

京都大学図書館システムの在り方検討委員会を設置

平成13年1月30日に開かれた商議会において「京都大学図書館システムの在り方に関する検討委員会」が設置されました。第1回委員会は2月22日行われました。

大学改革の一環として、京都大学の図書館システムの見直しを図る必要が生じたことから、この委員会では、附属図書館と各部局図書館・室の機能、連携の在り方等について検討し、本年7月までに結論を出す予定です。

古文献資料専門委員会を設置

本学附属図書館は、創立時から貴重な古文献資料を積極的な寄贈依頼等によって収集に努めてきており、所蔵する古文献資料群は、国内の図書館の中でも質量ともに極めて優れた研究資料となっています。最近においても一般市民から貴重なコレクションの寄贈があるなど、本学附属図書館に対する古文献資料の保存への期待も大きいものがあります。附属図書館としてもこの期待に応えるため、本学が収集する貴重な古文献資料の収集計画、所蔵する古文献資料の管理、保存、目録作成、公開等の在り方についての検討を促進し、所蔵する古文献資料に関して更なる研究が促進される必要があります。このことから、平成13年1月30日開催の附属図書館商議会において「古文献資料専門委員会」を設置し、委員12名が指名されました。同専門委員会は、古文献資料に関し大学としての収集計画の立案、所蔵古文献資料の管理、運用、電子化、修復、書誌作成等のあり方について検討します。また、貴重書の指定審査及び指定解除もこの委員会のもとで行なうこととなりました。